
無限と有限の狭間にて/前編

翼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限と有限の狭間にて／前編

【Nコード】

N3485J

【作者名】

翼人

【あらすじ】

引きこもり気味で本屋の場所を知らなかった翼人が、友達と本屋へ出かけた。行くのは簡単だ、友達の後ろについていけばいい。ただ帰り道となると、進んできた道を覚えていなかった私は、途中で友達と別れる時困った。「帰り道がわからない」。友達から道を教わり、とある道を通り直ぐ進んでいた時に翼人が妄想したこの先の自分の運命……。それを短編小説にした話、前編！！

このまま進んでいつて大丈夫なのだろうか。

暗い夜道を、ただ家に帰るために精一杯自転車をこいでいるうち、私はそんな事を考え始めた。

無限に続くかのようにも見えるこの一本道を進めば、本当に大通りに出るのか、あまり外出した事のない私にはさっぱり分からない。ただ友人に言われたとおり、このまま進んで、本屋に来る途中にずっと辿ってきた大通りに出るのを待つ。

いったいどのくらいの時が過ぎただろう。時間の感覚が掴めなくなっている。ほんの数分しか経っていない気もするし、何時間もひたすら自転車をこいでいたような気もした。

私は、いつのまにか街灯の明かりしかない道をただただ前進していた。

どこにも人の姿が見当たらない。家も車もない。

私は恐怖すら感じ始めた。

真つ暗な道に、自分だけが存在する。このまま進めば、本当に分る道に辿り着けるのだろうか。永遠にこの道を彷徨って、帰れなくなるのではないだろうか。来た道を戻れば、元の場所に出るだろうか。

そんな思いを抱きながら、それでも私は自転車をこぐ足を止めなかった。

しばらくそのまま自転車をこぎ続けていた私の目は、ふと、横へと真つ直ぐ続く、大通りを認めた。

私はほっとした。

この道を真っ直ぐ辿っていけば、見知った道に出る。その道は、私がいつも使っている、通学路だ。

良かった。これで家に帰れる。

すると、その道の真ん中に、ある人影が現れた。

やっぱり人がいる。本当に良かった…。そうだね、人が消えるわけではないじゃない。

その人影の近くまで行くと、やがてその人影の相貌がしっかりと見えてきた。

帽子を被った、優しそうな老人だ。チェックの柄のセーターを着ていて、とても温かそうだった。

すると、その老人が自分に話しかけてきた。

「どうしたんだい、お嬢さん。こんな遅くにこんな所には危ないよ」

最近不審者情報が多い。私は、きっとその事だろうと思った。

「友達と本屋にいたんですけど、気がいたらこんなに暗くなっちゃって、今帰ってる途中なんです」

私は自転車から降りた。

そう、今日は友達の家に遊びに行った後本屋に行って、そのまま立ち読みをしてた。そしたらいつのまにか辺りが暗くなっていたから、急いで家に帰っている途中だったのだ。

だが自分はまだあまり外出する事がなく、一人で帰るには道があまり分からなかった。だから友人に道を聞いたのだ。友人は「この道を真っ直ぐ行けば、知ってる大通りに出る」と教えてくれた。だから自分はひたすら自転車をこいで、大通りに出るのを待ったのだ。

「そうかい。寒い中大変だねえ」

寒い…？

ああ、そうか。今は冬だ。家を出る前は雪も降っていたんだ。気が付いた瞬間、一気に寒さがこみ上げてきた。否、最初から寒かったのだ。

身体が震え、吐く息は白く、指が凍るように冷たい。そして、寒さのあまり襲う頭痛。それらに今まで自分は気付かなかった。それほどまでに夢中になって自転車をこいでいたのだろう。本屋の前にあった自動販売機で買っていたホットミルクティーも、既に温かさを失い、冷たくなっている。

「可哀そうに。こんなに冷え切って」

老人は私の手を取り、擦ってくれた。

「おじいさんは、ここで何をしているんですか？」

こんな何もない所で、ただ立っているだけなんて。誰かを待っているのだろうか。

「わしかい？わしは、人がこの先に進まないように見張ってるんだよ」

見張る？何故だろう。この先には何も危険なものはないはずだ。それに、この先を進まなければ、自分は家に帰れない。

「でも、私はこの道を通らないと帰れないんです。この先で何かあったんですか？」

「うむ、何かあった、というより、もともとこの先に人は進んではいけないように決まっているよ。お嬢さんは随分頑張ってここまで来たみたいだけど、残念ながらここはお嬢さんの知ってる大通りではないな」

ショックだった。では、私はまだこの道を真っ直ぐ進まなければいけないのだろうか。

「この大通りを進んでも、そのまま真っ直ぐ自転車をこいでも、きつとお家には帰れないよ」

え…？

「おいで。わしが案内してあげよう」

老人は、優しく微笑んでそう言った。

(後書き)

後編↓<http://ncode.syosetu.com/n4069j/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3485j/>

無限と有限の狭間にて/前編

2010年11月9日17時22分発行